

特集

図書館から

妖怪を辿る



酒頼童子絵巻（貴重図書より）

- 新分館長挨拶（工学部分館・板倉分館）
- 随想：岡本太郎記念館
- 特別寄稿：大人の文化
- 世界の図書館探訪：節約好きのイギリス人は図書館がお好き？

KOSMOS

工学部分館を大いに利用してください

工学部分館の新しい建物も竣工してから1年半が経過し、連日多くの学生が入館、利用しています。川越キャンパスでは今年3月に新2号館が竣工し、新1号館とで五角形の図書館・メディアセンターを取り囲む形になっているため、講義の合間のわずかな時間でも教室から簡単に立ち寄ることができます。入館者数は平成13年度の18万人に対して、平成14年度は29万人と大幅に増えているという喜ばしい状況にあります。この図書館は閲覧席も460席と十分な数が用意され、私の学生時代にあった図書館の薄暗い席とはまったく逆の明るい快適な席で読書できるようになっています。

図書館は知の宝庫です。昔から今にいたる学術、文化、芸術などの図書資料の膨大な蓄積により、個人ではなかなか入手できない価値の高いものでも容易に無料で手にすることができるということは実に素晴らしいことだと思います。このことは、紀元前にすでにして古代エジプトのアレキサンドリア図書館、小アジアのペルガモン図書館など何十万冊の蔵書量をほこる巨大な図書館が存在していたことから明らかなように人類が早くから強く認識していたことがらです。

この数年、CDやDVDなどの電子メディアが発達し、文字、写真、絵画などの静的情報だけではなく、音声、映像などの動的情報までも含んだ非印刷資料が急激にふえており、図書館の大変革がこれから起ころうとしています。また、インターネットに代表されるコンピュータとネットワークの高度利用がますます発展し、図書館の電子化、すなわちe-ライブラリーの実現に向けての動きが始まりつつあります。学術雑誌をはじめ種々の資料の電子化、すなわち電子出版が続々と現れています。本学の白山、朝霞、川越、板倉の4図書館も連携して、図書館を取り巻く環境の急激な変化に対応していく検討を進めています。本学の図書館では書誌情報の電子検索については、すでにOPACシステムが用意されていて、タイトルや著者名がわからなくても簡単なキーワードを入力するだけで書籍のタイトルのリストが直ちに出てきて、どの図書館のどの階、コーナーにあるかがすぐに分かるようになっています。

インターネットを使って本学の図書館のホームページから入れるので、自宅からでも簡単に利用できますので、ぜひ利用してその便利さを味わってください。

ところで、インターネット利用などの情報検索の手段が飛躍的に進歩した結果、印刷された書物によらずとも知識情報を得ることが出来るようになり、若者の活字ばなれが進むという現象も現れています。しかし、このような情報システムの利用による情報獲得は高速性、利便性の点では非常に優れている反面、古い世代の私には書物を手にして静かな場所で深く集中して学問知識をしっかりと身につける、あるいは文学作品に感動するというようなことには印刷された書物の方が優れている、と感じられます。

図書資料の形態がどのように変わっていくか予測は難しいですが、ともかく、図書館はいやおうなしに大きく変わっていくはずです。工学部の図書館もこれから発展し拡大成長して、学生、教員はじめ皆さんに、また入学してくる皆さんに本当によい図書館だと思われるようになりたいと思っています。



鳥谷部 達 (とやべ とおる)

工学部コンピューショナル
情報工学科教授

専門分野：半導体計算工学
東京大学大学院理学系研究科
博士課程単位取得退学
工学博士

訳書（監修）：

「MOSFET のモデリングとBSIM3 ユーザーズガイド」(丸善)



私の本との関わり

朝早く学校のある駅を降りると、新緑の街路樹が目飛び込んでくる。学校までは、駅に足早に向かう数人のサラリーマンと女学生そして駅の反対側にある小学校に通う子供たち二、三人に出会うだけの静かな広い歩道を約15分歩きます。ここ板倉キャンパスは文科系1学部2学科と理科系1学部1学科から成り、約2,000人を超える学生が在学しています。私と図書館との関わり合いは平成9年4月に学部の図書委員になったのが始まりでした。当初、企業から学校へと赴任したばかりで、授業やその他諸々の仕事に追われ、委任された役割はほとんど果たせなかった苦い思い出があります。

私にとっての図書館は大学院に入学してから20年位自分の研究分野の文献調査と最新研究成果のチェックでしか利用していませんでした。齢を重ねるうちに図書館の利用を考え直そうと思いました。といいますのは私の自宅のある市では図書館の整備が進み、自宅の近くにも分館ができ、夏の暑い日にそこに行ってみると、館の中は涼しく、多くの老若男女が静かに自分の興味のおもむくまま読書したり、ビデオテープを見たり、一人一人時を有意義に過ごしているのに若干驚きました。この時から専門外の知識の集積に図書館を有効に利用しようと遅まきながら思い、現在はよく利用しています。

近年の情報量の多さは、多くの人にとっては極めてやっかいな事のように見えます。情報の取捨選択は大きさに言えばその人の命運を決めかねません。情報を有効に利用することは、やはりその人の知識量に依存しているように思う。そこで、知識の修得に多くの時間を割くことは言うまでもありません。図書館は知識の泉である、充分に利用されることが望まれる。

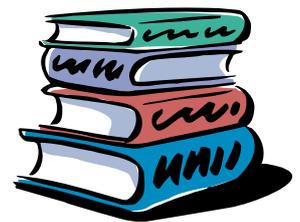
現在のように多くの施設が整っていなかった頃の図書館はやはり本の貸し出しがすべてであったように思う(当時、図書館は町や市にあまり整っていなかったように思う)。小、中学校時代、私は本を読むことがあまり好きではなかった。しかし、高校に入ってから本をしゃにむに読みあさるようになり、そこで仕入れた知識を基に多くの友人と討論したことを思い起こし、ほろ苦く、懐かしく、今でも胸が熱くなる。

今日、新幹線や電車の中で本を読んでいる若い人の多くが週刊誌であったり、分厚い漫画(別に漫画を読むことが悪いわけではないが、そこに描かれている絵

に、文章だけから各自が想像する世界を制限されるのではないか)の本(劇画?)である、わたしたちの時代と比べた時、私は何となく寂しさをおぼえる。近頃、必須科目を少なくし、自分自身で好きな科目を多く選べるようにして、大学生に余裕のある時間割を作らせている。このことは小学生から高校生までに授業時間を削って、若い人たちに余った時間を考える力と想像力をつける勉強をしてほしいと、何処かの役人が勝手に考えたことが大学にまで影響を及ぼしているように見える。しかし、多くの学生はこの余った時間をアルバイトに使っているように思われる(間違っているだろうか?)。また、授業していて練習問題をやらせようと、必ず答えはと学生から問われる。私は何時も答えを出すための過程が重要ですよと言うと、学生が不思議な顔をするのに最初戸惑った。これは大学入試におけるマークシート方式による欠陥であるように思う。しかし、色々欠点ばかり論っても何の解決にもならない。

最後に、私が日頃考えていたことをここに記することで、この誌面を閉めたい。世界中にはすばらしい小説、詩や随筆など沢山の種類の本(多くの本は翻訳されている)がある、若い人は(今では我々も一緒に)多くの本をしゃにむに読んで、友人と議論したり、何かに書くことで自問自答してほしい。自ずと幾つかのことが解決されるように思うのですが(そんな簡単なことではないかも)。

これからの図書館の果たす役割はますます重要になる。みんなの図書館を有効に利用してほしい。



野本 享資 (のもと きょうすけ)

生命科学部生命科学科教授
薬学専攻
東北大学大学院薬学研究科
修士課程修了
薬学博士
(自然界の神秘を探りたい)



図書館から妖怪を迎える



創立者 井上円了

この時季どんなメディアでも一度は取り上げる、幽霊・おばけなどの妖怪話。今年「妖怪博士」としても有名な創立者井上円了を通して、いつもと違う角度から妖怪を考えてみませんか？ きっと、東洋大学の図書館で、妖怪に関わる珍しい図書に出会えるはず…。

まずは、「妖怪博士」と呼ばれた井上円了について妖怪に関わる内容を中心に紹介しましょう。

東洋大学創立者：井上円了

〔「井上円了の教育理念」資料井上円了略年譜より抜粋〕

- ・安政5年（1858年）2月4日、越後国、真宗大谷派慈光寺の長男として誕生
- ・明治14年（1881年）23歳：9月 東京大学文学部哲学科に入学
- ・明治18年（1885年）27歳：7月10日 東京大学文学部哲学科を卒業
- ・明治19年（1886年）28歳：1月24日 不思議研究会を開催
- ・明治20年（1887年）29歳：9月16日 「哲学館」を設立
- ・明治26年（1893年）35歳：迷信打破のため、妖怪研究会を設立
- ・明治39年（1906年）48歳：6月29日 哲学館大学の「私立東洋大学」への改称が認可

★「妖怪迷信」の講演は哲学堂時代の10年間の内1年に100回程度またはそれ以上行なわれた年が何と7回もありました。

『桃山人夜話』五巻五冊 桃山人作 竹原春泉画

23×16cm 9行21字 外題 繪本百物語

<請求記号> 哲学堂文庫 わ四左三五 T2080

※**哲学堂文庫**とは、創立者井上円了が社会教育の場としての哲学堂公園に設置した図書館の蔵書であり、明治維新前の和漢古書21,000冊余り。孤本、稀覯本、善本の類が多く、その資料的価値については普く知られるところである。

以上『新編哲学堂文庫目録』より

<妖怪博士・井上円了>

さて、なぜ井上円了が「妖怪博士」と呼ばれたか、みなさんをご存知ですか？ この言葉を見ただけでは「妖怪が現実に存在していることを研究していたから」としか思われないうことでしょうか。ところが全くその反対で、「妖怪は迷信だ！」ということを主張していたのです。それは、日本の民衆が妖怪に心を惑わされることなく、自らの思想を改革するようにと、井上円了は妖怪の研究をしたのです。

それでは、井上円了が実際にどのような妖怪の研究をしていたか、代表例を紹介しましょう。

<コックリさんの謎解き>

皆さんは子供の頃、「コックリ（狐狗狸）さん」（または「キュービットさん」）をやったことがありますか？ 多分、大多数の方が経験されているかと思いますが、いろいろやり方はあると思いますが、2～3人位で、紙に「はい」「いいえ」や数字、自分達が尋ねたいことを書いて、鉛筆を皆で持ち、「コックリさん、コックリさん、おいでください」と言って、自分達が知りたいことを聞くと、皆で持っている鉛筆が紙の上を勝手に動いていき、答えの文字のところをぐるぐる回っているというものです。

当たるので、不思議でしたよね。本当に「コックリさん」が近くに来ているような気がして怖い思いをした方もいると思います。しかし、その原因を井上円了は解明したのです。

桃山人夜話

「狐者異」本文より

世にも恐ろしいことをこわいというはこれより出る詞なり



巻第壹 狐者異(こはみ)



巻第四 累(かさね)

「コックリさん」の起源は、明治の初めに下田に来たアメリカ人が、日本に広めたそうです。西洋では「テーブル・ターニング」と呼ばれ、テーブルの回転によって行われていました。

井上円了が解明した「コックリさん」の原因は3つ挙げられています。

第1の原因は、「コックリさん」の道具です。当初は3本の竹と飯櫃の蓋を使用していたので、上下左右、外から静かに触れても、動いてしまう構造になっていたからです。しかし、この原因は現代の道具には当てはまりません。

第2の原因は、どんな人でも数分間、手を空中に浮かべて物を支えていると、静止していることはできず、疲労とともに動いてしまいます。誰か一人が動かせば、他の人もつられて動き、勢いが増していくためです。

第3の原因は、意向および信仰の影響です。つまり、自分の問いに対して、あらかじめこうだろう、という思いが知らず知らずに、その作用を人間の筋肉の上に起こし、自分が必要とする結果を得ることができるのです。人間は習慣・意向・疲労・睡眠・刺激・錯乱などにより、自分が意識せずに体を動かすことがあります。この作用と同一であると井上円了は説明しています。そのため、感じやすく信じやすい人や信仰心の強い人は動きが強いと言われています。

「コックリさん」は人間の意識とは異なることで動いたため、鬼神だ、狐狸だ、と言われ続けてきました。しかし、すべては人間の心の中から生じているということです。たとえ自分の中の答えが決まっていたとしても、自信が持てなかったり、判断に迷っていたりする時は、はっきりとした答えを求め、安心するものです。その拠り所が「コックリさん」だったのですね。

<近代版ゴーストバスター>

その他にも井上円了は「天狗」、「幽霊」、「狐狸」、「鬼神」などを体験談や人から聞いた話を例に挙げ、解明しています。

みなさんも不思議な現象や今まで見たこともないものを発見した時は、是非「現代版妖怪博士」になって解明してみてください。解明できないことはない、井上円了は語っています。

参考文献

高木宏夫 三浦節夫共著 『井上円了の教育理念』改訂第6版

<所蔵館>	<請求記号>
白山	097.3711:T
朝霞	092.81:T83
工学部	092.81:T83
板倉	092.8:T83

井上円了著『井上円了選集』第十五巻 1998年3月 東洋大学発行

解説 表7 ‘哲学同時代の年度別演題類別’より

『井上円了選集』第十九巻 2000年3月 東洋大学発行

所収『妖怪玄談』1887(明治20)年5月 哲学書院発行

<所蔵館>	<請求記号>
白山	E097.1:IE
朝霞	097.1:IE
工学部	E092.81:T
板倉	092.8:IE

井上円了の「妖怪」に関する資料の一部を紹介します。
この機会に創立者の研究に触れてみましょう!!

タイトル	所蔵館	請求記号
妖怪学 / 井上円了講述	朝霞	C147.6:IE
妖怪学講義 (全6巻)	白山、朝霞	147.6:IE
新編妖怪叢書 (全9冊) 1.哲学うらなひ 2.天狗論 3.迷信解 4.通俗絵入妖怪談 5.妖怪玄談 6.おばけの正体 7.迷信と宗教 8.靈魂不滅論 別冊 妖怪博士・円了と 妖怪学の展開	白山、朝霞 工学部	147.6:IE
井上円了妖怪学講義	白山、朝霞	147.6:HI:2
妖怪学 (全6巻)	工学部	147.6:IE
自家格言集	白山	E159:IE
妖怪学入門	全館	388.04:T83
井上円了・妖怪学全集	白山、朝霞	147.6:IE57
妖怪学雑誌 (復刻版)	白山 朝霞 工学部	Z097.05:IE Z090:Y 147.6:IE
妖怪博士 井上円了 迷宮十三伝、第四伝	白山	ビデオ:V1462

この他にも、東洋大学には妖怪に関する資料を所蔵しています。井上円了の妖怪に関する資料と読み比べてみると全く違う部分もあって面白いかも…

◆水木しげる著

水木しげるの世界妖怪事典	白山	388:MS
生まれたときから「妖怪」だった	白山	726.101:MS95
水木しげるの妖怪事典	白山	388.1:MS-2
妖怪天国	朝霞	388.1:MS-4
水木しげるの中国妖怪事典	白山	388.22:MS

◆小松和彦著

妖怪学新考：妖怪からみる日本人の心	白山、朝霞	388.1:KK
日本妖怪学大全	工学部	388.1:KK61
憑霊信仰論：妖怪研究への試み	白山、朝霞	GB:1115

◆湯本豪一著

明治妖怪新聞	白山、朝霞	147.6:YK97
妖怪あつめ	白山	388.1:YK97

◆阿部主計著

妖怪学入門	白山、朝霞	388.1:AK
日本の妖怪たち	白山	147.6:AM

*請求記号の3段目はキャンパスにより異なる場合があります。
OPACで検索し、配架場所等確認してください。

表紙 紙 解 題

表紙絵：『酒顛童子絵巻』奈良絵本 大五巻
(貴重図書)

■寛永(1624~1644)頃写 紙高32.5cmの長巻
題籤「酒顛童子絵一(～五)」(但し巻二は、題籤の墨書が消えて不明)。内容は源頼光(948~1021)が主人公で、大江山にいる酒呑童子という鬼の怪物退治譚、武人伝説である。

岡本太郎記念館

今秋刊行予定の『パリ・日本人の心象地図』（藤原書店）を、いま5人の研究者と共同でまとめている。昨年春に出した『言語都市・パリ』（藤原書店）は、明治・大正・昭和戦前期の、個々の文学者や画家のパリ体験を、主なテーマにしていた。それに対して今回の本は、日本人がよく立ち寄った100ヶ所ほどのスポットと、60人以上の日本人の住所を、パリの地図にはめこみ、日本人にとってのパリの都市空間を、浮き彫りにしようという試みである。企画段階で直面した困難のひとつは、日本人の住所がなかなか、番地まで含めて正確に把握できないことだった。

画家の岡本太郎もそんな1人である。1929年に東京美術学校を中退した18歳の太郎は、父で漫画家の岡本一平や、母で後に小説家になる岡本かの子と共に、ヨーロッパに旅立つ。アリアンス・フランセーズでフランス語をある程度習得してから、彼はソルボンヌ（パリ大学）に入学し、哲学や民族学を学んだ。「ソルボンヌで勉強している間、私はなにか救われる思いだった。課題を与えられ、それをまとめるために図書館にこもり、数冊の本を積み上げて静かに読書しているとき一種の恍惚感にひたったものである」と、彼は「ソルボンヌ時代」に記している。

パリ生活は第二次世界大戦下の1940年まで続くが、岡本太郎がパリに残した最大の足跡は、画家としての活動だろう。純粹抽象を志した彼は、1933年にアプストリュクシオン・クレアシオン協会に加わり、カンディンスキーやモホリ・ナギらと共に、抽象芸術運動を展開する。そしてその5年後に開かれたシュールレアリスム国際展に、「傷ましき腕」を出品したのである。岡本太郎が住んでいたのは左岸のモンパルナスだが、詳しい住所は判明していなかった。在仏大使館が外務省に送った膨大な公文書を、外交資料館で調査しても出てこない。立項は無理かなと半ば諦めかけた頃、川崎市岡本太郎美術館に問い合わせ、ようやく判明した。学芸員の楠本亜紀さんが調査なさった、パリ大学の学籍簿に、住所が記載されていたのである。

岡本太郎記念館館長の岡本敏子さんからは、太郎がパリの街を歩きながら、青春を回顧しているビデオテープがあると、ご連絡をいただいた。さっそく5月9日に、共同研究者の1人、帝塚山学院大学教授の宮内淳子さんと訪ねる。南青山にある記念館は、戦前に岡本一平・かの子・太郎が暮らした場所である。太郎は戦後も半世紀近く、ここを拠点にして絵を描き続けている。記念館では1時間半ほど、岡本敏子さんから生前の太郎についてお話を聞かせていただいた。お借りしたビデオテープの中の太郎は、エネ

ギッシュにモンパルナスを歩きながら、パリ市民に気軽に話しかけ、記憶の彼方から昔のパリを呼び戻そうとしている。

記念館には展示物以外に、もうひとつの見所がある。それは友人の坂倉準三が設計した建物。坂倉は岡本太郎と同じ1929年にフランスに渡り、パリ大学で建築を学んだ。その後は、1930年代の日本に大きな影響を与える、ル・コルビュジェの建築事務所に所属している。坂倉を有名にしたのは、1937年のパリ万国博覧会での、日本館の設計だろう。日本政府案を無視して、自身の案で日本館を建てた坂倉は、ル・コルビュジェをも抜いて、万国博最高大賞を受賞してしまう。岡本太郎のアトリエも、ブロック壁に凸レンズ形の屋根を乗せた斬新なもので、屋根の下の窓の曲線が美しい。

記念館を辞去する頃に、ちょうどランチタイムになった。宮内さんも僕も食いしん坊なので、歩いて数分のフレンチレストラン、レ・クリスタリーヌに行く。オードブル、メイン、デザートを一品ずつ選ぶ、プリフィクススタイルである。デザートの目玉は、チョコレートソースがたっぷりかかった、限定20個のフランス風シュークリーム。コーヒー付きで1500円というリーズナブルな価格設定には、いつも感心させられる。すっかり満ち足りた気分になって、午後の3コマ連続の演習も、あっという間に乗り切った。岡本太郎記念館も、レ・クリスタリーヌも、インターネットで検索できる。南青山に行く機会があったら、ぜひ。



和田 博文 (わだ ひろふみ)

文学部日本文学文化学科教授
文化学・日本近代文学専攻
神戸大学大学院文化学研究科
博士課程中退
著書:

『テキストのモダン都市』（風媒社）、
『コレクション・日本シュールレアリスム』全15巻（監修、本の友社）ほか



大人の文化

岡本太郎記念館館長 岡本 敏子

いきなり耳のすぐうしろで、「ウッソー、キャソソ」と、けたたましく笑うから、びっくりして振りかえる。若いお嬢さんが携帯電話に夢中でお喋りしているのだ。近頃、大分馴れたけれど。

そんなに一刻を争う用件でもないらしいのに、みんなどうしてあんなに、道を歩きながら大声で電話をかけるのだろう。

街の至るところで、ひっきりなしに電話をかけあって、電波が飛びかい、しかも双方移動しているのだから、あの眼に見えない線が浮びあがって見えたら、さぞ壯観だろう。私が絵描きだったら、そういう絵を描いてみたいものだ。

聞くともなしに耳に入ってくるのが、「うん、いまだここの前。あと二・三分で着く。」なんて。そんなら行けばいいじゃないの、とその人の顔を見てしまう。何ということはない、普通の人なのだ。

歩きながら、やたらに水を飲んだり、ものを食べたりしている。砂漠の中で行軍しているんじゃないんだから、そんなに緊急の必要として、身体が欲しているのかしら。

こらえ性がないのか、習慣でああなってしまったのか。ともかくあんまり美しい景色とは思えない。つまり、プライベートと公、という区別が薄

れて来ているのだろう。なにも人前だから、とそんなに威儀を正さなければならないとは思わないけれど、ある程度のケジメはあった方が、お互いに気持ちがいいのではないか。

昔の江戸の町人は人ごみを歩くとき、ぶつかるなんて勿論とんでもないが、袖をふれあうことも恥とした。あいつは人なかの歩き方も知らない田舎者だ、という訳だ。都会には都会で暮すルールがある。それを守ってこそスマートに、しなやかに生きられる。ガサツなように見えても、世間さまにはきちんと気

を使っていたのである。

いまの日本には、こういう大人の文化というものが壊れてしまっているのではないだろうか。

エレベーターの乗り降りに、ちょっとぶつかりそうになったり、肩がふれあったりする。ニューヨークでもパリでも、突嗟に、「ソーリー」とか「パルドン」と会釈するのはごく当り前のマナーだ。でも東京ではがつんとぶつかりそうになっても、知らん顔。誰も何とも言わず、にらみつける。エレベーターの扉の前で、とまれれば誰か降りてくる人がいるのは予測できそうなものなのに、立ちふさがって平気。扉があくやいなや押し入ってくる。

朝晩、ギュウギュウの満員電車で、人を押しのけ突きとばし、ゴミの塊のようにガラガラッと詰め込まれるのに馴れてしまっているからだろう、とちょっと悲しい気がする。

日本中こんなに都市化してしまい、今や誰でも都会人なのだ。狭いところにより集って生きる。人が多ければ多くなり、密集して暮すための快適なマナー、ルールというものがある。もうそろそろ、みんながそれを考えはじめてもいい頃ではないか。

有事法制も大事かもしれないが、こういう日常の、何でも無い、誰でもいつでも身にふりかかってくる些事をこそ、きちんとこなしたい。お互いにスマートに、優雅に、さりげなく。

これは教育の問題でもある。近頃の親は何でも学校にお任せしてしまう傾向があるようだが、こんなことは頭で覚えるよりも自然に身体がそう反応する、躰の領域だ。それと美意識。あんな態度はキタナイ、と思えばやらないだろう。知らないからやってしまう。みっともないことに気づかず、平気である。

ファッションに通じていたり、有名店の情報に詳しいばかりが都会人の証ではない。日常のちょっとした振舞い、さりげない心配り。男も女も、粋でありたい。

夏の日にざかりに、蟻の行列がせっせと何か運んでいる。往きの列と帰りの列。すれ違うとき、ちょっと御挨拶しているような風に見える。何の合図か知らないが。整然として、礼儀正しく。しかも見るからに個々の自由意思なのだ。それがいい。

人間社会も上から見下ろしたらあんな風だといいいのになあ、と思う。殺しあい、ぶつかりあって、互いに我こそ正義、正義と罵りあう。不毛。そして美しくない。



岡本 敏子 (おかもと としこ)

財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団理事長
岡本太郎記念館館長

1948年に岡本太郎氏の秘書の後、岡本太郎氏の養女となる。

岡本太郎氏の死去まで50年間あらゆる制作に立ち会い、取材に同行、口述をメモ、執筆を扶ける。

お金を賢くつかう、ということにイギリス人は余念がない。自分がどんなにか「いい買物をしたか」ということを仲間と自慢しあっているのにしばしば出くわすことがある。それは男性でも女性でもかわらない。なかでも驚嘆するのは、本来お金をもうけるべきひとたちが、赤の他人の客に賢い使い方を教えてくれることである。

たとえば、トラベラーズチェックを現金にして口座にいられてもらいに銀行へいったときのことである。「そのチェックだったら、うちでは口座があっても10%の手数料をとるけど、〇〇旅行店に行ったら5%だからあっちにいらした方がいいですよ」と言い、そこに行くまでの地図を書き始めてくれている。私からの手数料でもうけるべき銀行がなぜ？という疑問が頭をよぎりながら、ようやく状況をつかむにいたってその銀行を後にする。そこまで言われて「でもいいんです」なんて言って親切な助言を受け入れないのは、よっぽどのお金持ち気取りである。こんなことは一度や二度ではない。郵便局でも「この小包の中身は何？もし本も含まれているんですしたら二つに分けて送った方がずっと安いですよ」。どんなにその時急いでいても、そこまで言うてくださるのなら、とガムテープなどを借りながらいそいそと荷造りをしなおすことがしばしばであった（ちなみに、特に私が見るからに貧乏人という風体ではなかったことをお断りしておくべきであろう）。

このように、イギリス人にとって「けち」であることは、うしろめたいことどころか万人のめざすところであり、それを成し遂げることは誇るべきことなのである。ここまで読まれた方には、こんな話がどうして図書館に結びつくのだろうかと思惑に思っている方もあるかもしれない。

昨年、長期海外研究で滞在したマンチェスター大学で私は、イギリス人の節約好きと図書館のサービスの充実が大きく関わっているという確信にいたってしまった。滞在中ほとんど1日おきぐらいに会っていた社会学部の教授が、その「ヘビーユーザ」ぶりを大に見せつけてくれたのである。私はこのS教授の教え子でもあるので、彼の授業の準備から研究まで、いい意味で巻き込まれていた。それを通じて図書館というものが、大学のなかでいかに教育および研究の大きな拠点として存在するのかをあらためて知ることになった。S教授を眺めていた私の目を通して、その一端を紹介してみたい。

私はS教授と論文を書こうとしていた。同じようなテーマの論文を洗いざらい調べるといふ作業がはじまった。データベースにいろいろなキーワードを入れてくまなく調べた。これを次のような「いもづる式探索」と平行して進めた。関連論文を読みながら、各論文で引用されている他の文献で、読む価値がありそうなものを次々にチェックしていく。そして図書館で入手できるかどうかを調べる。OPACは本の情報だけでなく、雑誌についてはデジタル形式がある場合にはその全文を入手できるようになっている。欧文の雑誌には、デジタル形式で利用できるものが年々増えてきている。それは最近刊行された論文に限られないこともある。たとえばJSTORというデータベースでは、世

界の大学図書館が協力し合って創刊号にさかのぼって現在にいたるまでデジタル化しており、人文社会系を中心に、古い雑誌では1800年代の論文も入手することができる。古く重たい雑誌を探し出してコピーに行く前に、JSTORにまず自分が探している論文がないかを調べるといふ行動パターンをとるのはS教授だけではなかった。

見たい本が自分の図書館になかったら、他の図書館にあるかどうかを調べる。全国の学術図書館のOPACを横断的に調べられるサイトを使う。申し込み後1週間前後で届くことが多く、館外に借り出すこともできるので思う存分その本を利用することができる。他の図書館にもなければ、今度は自分の図書館に購入希望をだす。本が利用できる段階になったら、希望を出した利用者にメールが届くようになっている。

見たい本が図書館にあるのはわかったが、貸し出し中という場合には、すかさず予約をかける。そうすれば自動的に現在借り出している利用者に、予約が入ったため2週間以内に返すよう依頼するメールが届き、2週間以内にほぼ確実に借り出すことができる。当初の期限がずっと先にあるだろうが、教員だろうが容赦はない。返し遅れたら遅れた分だけ1日あたり10ペンス（日本円にして20円）払う羽目におちいる。予約のかけあいっこになることもある。

最後に、S教授が定期的にチェックをするのは新着図書である。私が院生だったころは新着図書の棚に見に行くようになっていたが、今は図書館のサイトで見られ、1日ごとのリストが蓄積されているので、見損なった時期のものもさかのぼって見るができる。S教授はこれを2、3日ごとに見ては、研究室のインターネットから近日中に借り出す予約をする。新着なのにもかかわらず、すでに貸し出されているものも多く、他の利用者も活発にこのリストを見ていることが伺われる。それでもすかさず予約をかけてしまうのがS教授流。このリストを見ているせいか、S教授の領域を越えた本の知識はとてつもない。

こうしたS教授のヘビーユーザぶりもすごい、それを支えるかのように「かゆいところに手が届く方式」で組み立てられているサービスにも目をみはる。そして、S教授の研究室は空っぽかという、3つの壁には床から天井までびっしりと本が詰まった棚がある。厳選に厳選を重ねてS教授が購入した本たちなのである。

池谷 のぞみ (いけや のぞみ)

社会学部メディアコミュニケーション学科助教授

社会情報学専攻

マンチェスター大学大学院社会学博士課程修了

Ph. D (Sociology)

論文：「生活世界と情報」

『情報探索と情報利用』田村俊作編（勁草書房 2001）ほか

（本の森を探検してみてください。）